

No. 361【2019年6月21日配信】

川田水穂の「墓地移転論」(担当:工藤)

こんにちは！ 室長の工藤です。

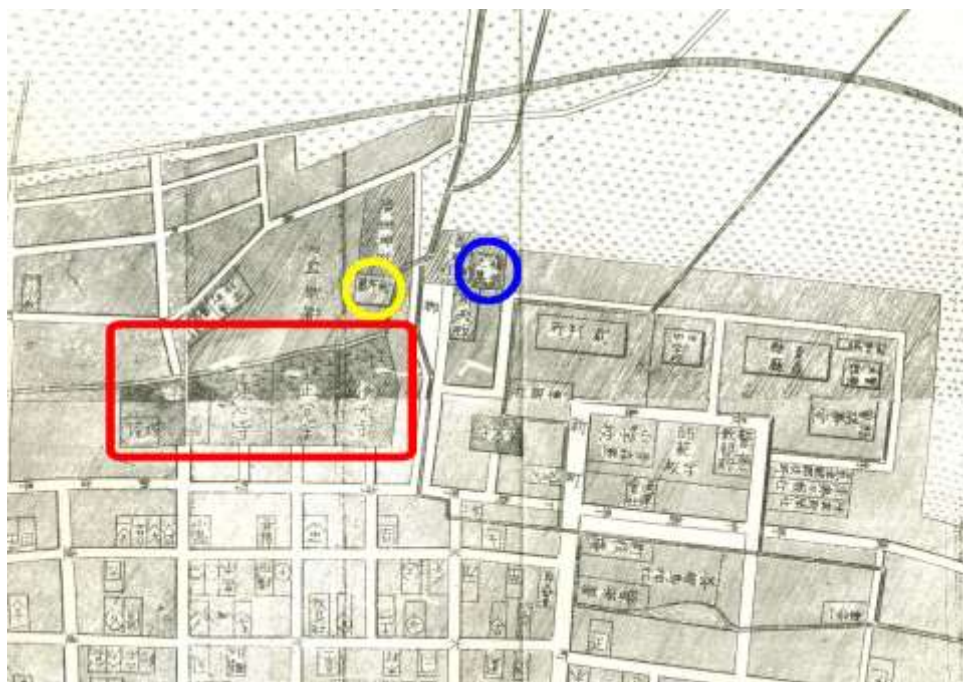
今回は先月紹介するはずであった川田水穂の「墓地移転論」を取り上げます。

人名事典によると、川田は青森出身で青森市(町)の助役に就く前は、読売新聞や陸奥日報といった新聞社に勤めていました。ですから彼は文筆に長け、しばしば『東奥日報』紙にも自身の主張を寄稿しています。なかでも、青森町の助役時代の明治25年(1892)～同28年にかけて連載した「青森水道論」は(明治30年に1冊にまとめて出版)、水道敷設に向けた青森町の世論喚起に一役買ったといわれています。その川田が青森市の助役を務めていた明治32年5月、『東奥日報』紙に「墓地転換私擬案」すなわち「墓地移転論」を発表したのです(5月20日付)。

川田は市街地の南側外縁部の墓地について、①墓地が手狭になってきている、②将来の市街地拡張の障碍となる、③現在の墓地は規則上現用が認められない、④旧浦町村との交通を遮断するため合併のメリットを十分に得られていない、という4点から移転すべきと主張します。彼がこの主張を明治32年5月という時期に発表した理由はふたつ考えられます。まずひとつめは、④にあるように青森町は南隣の浦町村と合併して明治31年に市制施行を実現しています。それから1年が経過し、墓地が両地域の交通の妨げになることを実感したのでしょうか。そしてそれは、近い将来起こるであろう③とも関わります。

ふたつめは、明治29年8月の浦町村大火で類焼した正覚寺の再建が、いよいよこの5月に始まりそうになっていたのです。正覚寺が再建されてしまってからでは、墓地移転は難しくなると川田は判断したのです。

また、川田の主張は単に墓地を移転するのみならず、将来的には墓地を持つ寺々の移転も視野に入れていました。ちなみに、寺院移転の主張は明治43年に顕著となります。



墓地の位置(明治25年発行『青森実地明細絵図』)

※赤い線で囲んだ4か寺の境内北側に墓地がありました。また、青い線で囲んだ場所には「神道之墓」が、黄色の線で囲んだ場所には「戦死墓」がありました。

さて、川田の主張に刺激され、『東奥日報』紙では「川田氏の墓地転換私擬案を読む」「続墓地移転論」という記事が続いて発表されました。いずれも墓地移転には賛成で、その後の世論も墓地の移転には肯定的でした、しかし、墓地移転は実現せず「長年の宿題」となっていきます。何故かといえば、もちろん青森市の財政的な問題もありますが、いつまでも移転先を確定できなかったことに尽きます。

移転先が滝内村三内に決定するのは、川田の墓地移転論が発表されてから 37 年経った昭和 11 年（1936）のことです。なお、墓地移転論は川田以前にも衛生面から主張されてはいましたが、行政・市会そして世論を巻き込んで展開した墓地移転問題は、やはり川田の主張がきっかけとなったと言っていいでしょう。